「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という氣持ちでお届けしています。

りゅうま伝

60号
2024年11月26日
高野 竜馬

「姥捨て山」考

良いお客様に恵まれているな、と日々実感している高野です。この仕事の最大のメリットは、業種・年齢・性別を問わず様々な方とご縁が持てるので色々な専門家の話を聞けるところにあります。

昨年、春から母と同居して介護を始めるにあたっては、沢山の介護関係者の方のご意見を頂きました。中でも20年超お付き合い下さっているIさんはベテランのケアマネさん。介護される側だけでなく、介護する側の心のケアも流石で、「介護が苦しくなったら、遠慮せずに施設に助けてもらったら良いですよ」と言ってもらえ、凄く氣が楽になったものです。

その方に「自宅介護の限界は？」と訊くと、

「睡眠不足になったら、仕事に悪影響が出たら、家族間の不和が起き始めたら、施設にお願いするタイミングですね。」

と事前に言ってもらえたのはとても有難いことでした。

正直、昨年5月から同居を始めて、ものの3日としないうちに睡眠と仕事には影響するなと直感しました。

同居当初 一晩に3回起きて、トイレを探す母。基本、夜中のトイレ探しは私が対応したので朝起きはとんと出来なくなってしまいました。

幸いだったのは家内が甲斐甲斐しく面倒を見てくれたことでした。言い訳に聞こえるかもしれませんが、息子が母親の介護をする限界のようなものも感じました。

この1年半で2回もコロナにかかり、今年になっては転倒が相次ぎ骨折も。歩く力が弱まったことからグループホームへの入居を決めたのですが、私の心の中は「姥捨て山」に親を捨てるような感じもして、なかなか踏み切れませんでした。

また、そんな時に限って次のような文章を目にするのです。

「日本民族学の父」と呼ばれた柳田国男の随筆に、「親捨山」という戦時中に執筆された作品があります。（中略）ある男が60歳になった親を畚（もっこ）に入れ、幼い息子に片棒をかつがせて、山の奥へ捨てに行くという話。親を山へ置いた後、男は用済みになった畚もそこに置いて帰ろうとしますが、息子が「これは家へ持って帰りましょう。いずれまた必要になるから」と言います。その言葉に我に返った男は親を連れ帰ったという話です。

この文章が今もずっと、頭を離れません。

二千日以上続けている母への一日通信は、これからも継続します。夫婦でいくつもの施設を何度も見て面会の自由度の高いグループホームを選びました。

グループホームを姥捨て山にするもしないも自分。面会の実践をしていきます。

感謝之印

たかの財形事務所
〒819-0374　福岡市西区千里 707-13
090-3407-2123
https://www.takanozaikei.com メール fp.takano@gmail.com